

合理的配慮の提供事例報告書【小学校】

事例の概要

A小学校の知的障害特別支援学級に在籍するB児(6年生)に対して、連続性のある多様な学びの場を活用して、合理的配慮を行った事例である。B児は、これまで様々な実践を積み重ね、通常の学級での友達関係や集団参加の意識が高まり、徐々に安定した学習が展開できるようになってきている。今後、中学校への進学を見据え、個別の活動をもとに自信をつけさせ、集団での活動機会を大切に交流及び共同学習を改めて見直した。そこで、知的障害があるB児が、今まで積み上げてきた能力を生かした活動を交流学級で認めてもらえ、達成感・成就感のある学習活動を展開するとともに、通常の学級の児童にとっても意義のある交流及び共同学習を実践してきた。

- | | | |
|------------|------------|------------------------|
| 1 対象児童の障害種 | 知的障害 | |
| 2 障害の程度 | 該当(知的障害) | ※学校教育法施行令22条の3に該当か非該当か |
| 3 在籍状況 | 小学校・特別支援学級 | |
| 4 学年 | 小6 | |

5 対象児童の実態

B児は、A小学校の知的障害学級に在籍する6年生の児童である。知的には軽度の遅延域に位置しており、領域間にばらつきがみられる。視覚認知面に弱さがあり、多くの視覚情報の中から大事なものに注目するのが苦手である。獲得語彙は少なく、言語理解面の弱さもあり、質問の意図がわからないことで集中を維持しにくいところがあり、興味のあることに注意が向く傾向がある。指示は具体的に、ひと目で分かりやすく提示し、見通しをもってゴールまでやりきることによって達成感が持てるような工夫が必要である。取り組みの様子からは、自信の無さもうかがえるが、関心のあることは積極的に取り組む意欲がみられる。日常生活で役割を持たせ、一緒に経験しながら、その都度、認めほめてもらい、他者のために役立っていると実感できる経験を積んでいくことで、自己有用感を高め、自信を持って生活できるように支援している。

6 対象児童についての合意形成に至るまでの経緯

(1 誰からの申し出か 2 申し出の内容 3 連携、調整した関係機関 4 合意形成に至った結論)

- 1 B児の保護者
- 2 自信をなくしているため、否定的な言葉が多くなってきているという相談があった。
- 3 相談支援専門員を中心としたケース会議にて、B児が関わる学校、保護者、病院、療育機関、放課後デイサービスの6者がどのように対応していくか話し合った。
- 4 発達検査の結果より、少しの注意でも意欲が低下し、がんばろうとする行動に結びつきにくいことから、「学校や家庭では、できるようになったことを今まで以上にほめていく。」「学校や家庭以外では、自分らしく長時間過ごせるように配慮し、自己肯定感を高めていく。」そして、「本人の成功体験が増え、より自分に自信がもてるようになることで、物事に最後まで取り組むことができるようになる。」「家事など、一人でできることが増え、生活力が身につくことで、将来やりたいと思っている仕事ができる可能性が高まる。」と確認した。

7 基礎的環境整備の視点と概要

基礎① ネットワークの形成・連続性のある多様な学びの場の活用

本校は多様な子どもが在籍しており、通級指導教室には8名、特別支援学級もB児が在籍している知的障害学級4名だけでなく自閉症・情緒障害学級に4名もあり、個別の学習だけでなく小集団での共同学習もしやすい。交流学級で、友達の協力を受けながら無理なく活躍できる場の設定をしている。

C市では、定期的な小中連携の会や特別支援教育コーディネーター会議において、児童生徒の情報交換を行っている。特別支援学級在籍児童の中学校への進路選択に当たっては、保護者同伴の学校見学会を実施している。また、中学校が小学校への出前授業を行ったり、6年生対象のオープンジュニアハイスクールを開き、小中の連携を図っている。

基礎④ 教材の確保

C市では、各学校に、電子黒板、プロジェクター、実物投影機、タブレット型端末などのICT機器を配備している。教師用タブレット型端末、特別支援学級用ソフトウェアについても導入している。そのほか、多層指導モデルMIM「読みのアセスメント・指導パッケージ」についても、その活用効果から各学校に導入されているので交流学級でも誰にでも良く分かるUDの授業改善に取り組んでいる。

図鑑や紙芝居、絵カード等、B児の特性や発達段階に応じた教材の確保に努めている。

8 合理的配慮の観点と概要

合理①-2-2 学習機会や体験の確保

運動会、修学旅行などの行事には、走る距離を短くしたり、準備に取り掛かるのを早めにする事で、すべて参加できた。同じ学年の友達だけでなく、縦割り班では低学年と過ごす体験を通して、自発的に他学年の子どもに関わった。また、B児にとって初めての場所になる自然学校や市の音楽会会場は、5年生で事前に下見をすることで見通しをもって行事に参加できるよう配慮した。音楽会のリコーダー演奏は、個別に学級で練習し、上達を友達や先生に褒めてもらえる場を設定した。ほめてもらえる喜びを味わわせるよう配慮したところ、B児は自信をもって大勢の観客の前でも堂々と演奏することができた。

A小学校では、特別支援学級同士の合同学習も実施しており、B児もその集団活動や体験活動に6年間参加し、気の合う友達も増えた。学年の違いや能力差を踏まえてリーダー的役割を経験させるなど、通常学級との交流及び共同学習とはまた違った学習の機会となっている。

合理①-2-3 心理面・健康面の配慮

B児は、初めての事や手順の分からない事が多くなると、不安が高まり、爪をかみはじめ、行動が消極的になっていく。委員会を選ぶ際、入学当初から積み上げてきた音読を生かし、献立の放送を行い、ワゴンエレベーターを使って運ぶ給食委員会にした。献立の放送原稿は、ルビがふられており、初見の原稿でも、自分で言葉を区切ることで、少し練習するだけで読むことができた。また、放送室に入ることや機器の操作については、最初は、緊張していたが、早く仕事を覚えてできるようになりたいと意欲的に取り組んでいる。回を重ねるごとに達成感を持ち、自己有用感を実感させる活動となり、自信へとつながっていった。

ワゴンを運ぶ仕事は、「エレベーターと一緒に乗ってほしい。」と頼むことから始め、慣れてくるにつれて、「一人でやります。」と言えるまでに至った。給食終わりには、牛乳パックを開く1年生を自主的に手伝う姿もみられ、自分のできることを生かし、人のために役立つ喜びを感じていた。

9 成果と課題

自信のなさから、自分を卑下するような発言が多く見られ、交流や共同学習を好まなかったB児が、「早く委員会の仕事を覚えたい、一人でもやってみよう。」と思えるようになったことは、大きな成果である。優しくサポートしてくれるペアの友達など交流及び共同学習を推進することで、お互いの違いを認め、指差しだけで教えてくれたり、できるまで黙って待ってくれたりする支え合う心を育てることにつながることを実感した。B児が自主的に活動できる学びの場を設定し、友達と関わる中で生活経験を広げ、社会性を養うことにつながった。

今後は、個別の教育支援計画・個別の指導計画の共有化を図り、将来を見据えた連続性のある支援体制を構築し、その支援や合理的配慮について保護者との合意形成をする必要がある。また、関係機関とも連携し、中学校への円滑な引継ぎを目指す。B児の支援内容や資料を小・中学校間で引き継ぎ、活躍できる場の設定をお願いする。また、同じ学校の友達の協力を得て、新しく出会う生徒に対して理解を促し、B児にとって自信を持って取り組める環境を整える。